

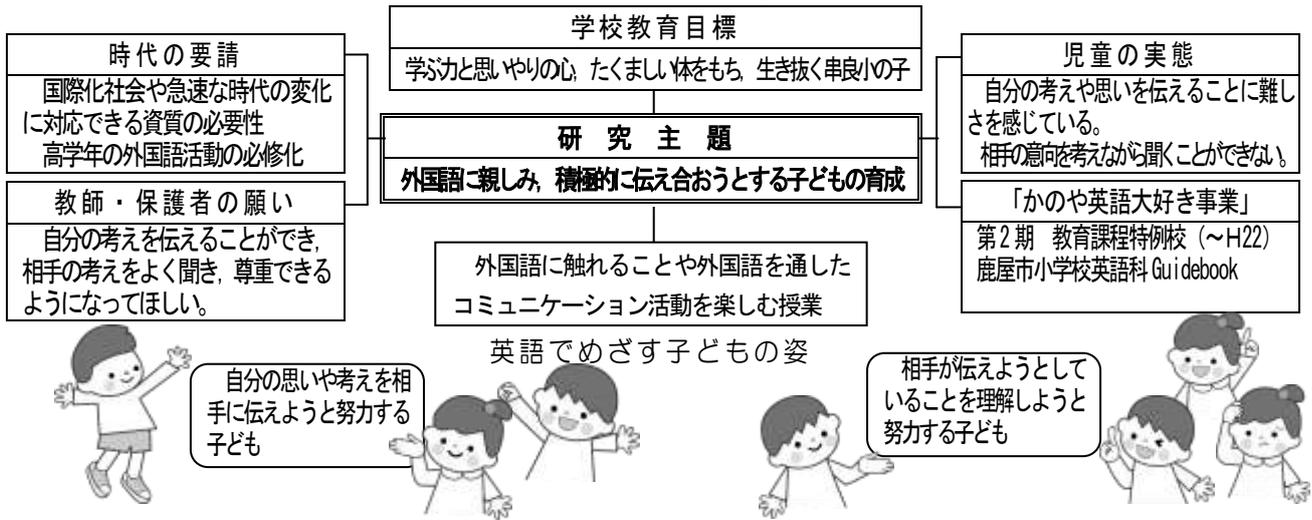
目 次

| | | |
|---------------------|---|----|
| I | これまでの研究内容と成果及び課題について（PDCA サイクルを通して） P | 2 |
| 1 | 研究主題の設定（Plan） P | 2 |
| 2 | 研究の実際（Do） P | 2 |
| 3 | 研究の成果と課題（Check） P | 2 |
| 4 | 研究の改善（Action） P | 3 |
| II | 新たな研究主題と設定の理由 P | 4 |
| 1 | 研究主題について P | 4 |
| (1) | 「外国語に自ら親しみ，積極的に伝え合おうとする子どもの育成」とは | |
| (2) | 副題として，新たに加えた「3つの柱の相互作用を生かした指導と評価の工夫」とは | |
| ア | 「3つの柱の相互作用を生かした指導」について | |
| イ | 基本的な評価の考え方について | |
| 2 | 主題設定の理由 P | 5 |
| (1) | 外国語活動創設の経緯から | |
| (2) | 鹿屋市の小学校英語教育における変遷から | |
| III | 本年度の研究の構想について P | 5 |
| 1 | 研究の仮説 P | 5 |
| 2 | 研究の視点，内容及び実際 P | 6 |
| (1) | 視点Ⅰ：「言語と文化に関する気付き」をもとに，外国語活動における3つの柱の相互作用を生かした学習指導の在り方を明らかにする | |
| ア | 一単位時間の中で3つの柱を相互に関連付けていく授業デザイン | |
| 実践事例1 | ：単元名「かぞえてみよう」第1学年（2／2時間目） | |
| 実践事例2 | ：単元名「数をたずねよう」第4学年（1／3時間目） | |
| イ | 単元全体の中で3つの柱を相互に関連付けていく指導計画デザイン | |
| 実践事例3 | ：単元名「ランチクイズを作ろう」第6学年（全5時間） | |
| (2) | 視点Ⅱ：外国語活動における効果的な評価の在り方について明らかにする | |
| ア | 一単位時間における学習評価プランについて | |
| 学習評価の対象について | | |
| 一単位時間における学習評価プランの実際 | | |
| イ | 発達段階に応じた振り返りカードについて | |
| IV | 研究の成果と今後の課題 P | 17 |
| 1 | 外国語活動に対する子どもの意識調査 P | 17 |
| 2 | 授業で用いた振り返りカードの分析 P | 17 |
| 3 | 指導者による学習中の子どもの観察の分析 P | 18 |
| 4 | 成果と課題 P | 18 |

I これまでの研究内容と成果及び課題について（PDCA サイクルを通して）

1 研究主題の設定（Plan）

本校では、平成22年度、研究主題を「外国語に親しみ、積極的に伝え合おうとする子どもの育成」と設定し、串良・輝北英語圏の研究推進校として研究に努めてきた。



この主題における「外国語に親しむ」とは、「子どもが自ら外国語の音声や表現に触れようとすること」であり、同時に、「外国語を聞く・話す活動を楽しむこと」ととらえた。それは、子どもたちに外国語の表現を習得させることを期待するものではない。また、主題に「積極的に伝え合おうとすること」を加えたのは積極的に自分の思いを伝えたり、相手の思いを理解したりできる子どもを育成することを目指したからである。自分の思いを伝える活動を通して、他者に対して自分の思いを伝えることの心地よさや大切さ・難しさを実感させることができ、相手の言葉や会話を聞いて相手のことをより理解させることができると考えたからである。

2 研究の実際（Do）

1年目の研究・実践では、主に「英語を学ぶ雰囲気づくり」、「英語表現に自然に慣れ親しませる指導」や「少ない言語素材を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する指導」について、様々な手だての工夫を試みてきた。

- ・ 導入の工夫と学習モデルとしての教師の態度（ITの効果的な役割分担）
- ・ InputからOutputへのスモールステップの指導（十分なInput活動の確保による不安の解消）
- ・ 子どもの興味・関心を引き出すActivityの工夫（やり遂げる達成感を味わわせる工夫）
- ・ Information Gapによる必然性のあるコミュニケーション活動の仕掛け
- ・ 英語を学ぶことの楽しさを実感する振り返り（自己・相互評価）活動の充実

3 研究の成果と課題（Check）

これらの研究・実践を通じた成果は、主に以下のとおりである。

- 教師の意識調査から（平成23年2月実施、対象者11人）
 - ・ 英語についての基本的な考え方を共通理解でき、授業に対する不安がなくなった。（授業に対する不安があまりない36%、以前ほどなくなった55%、まだ不安がある9%）
 - ・ 一時間の授業の流れ、一単元の流れ、HRT・JTE・ALTそれぞれの役割分担が明確になり、授業を楽しめるようになった。（授業がとても楽しい82%、楽しい18%、楽しくない0%）
- 子どもへのアンケート調査から（平成23年2月実施、対象者242人）
 - ・ 子どもが英語の学習に対して不安をもつことなく、生き生きと楽しむことができるようになってきた。（英語を使ったゲームをしたりアクティビティをしたりする時間がとても楽しい75%、楽しい22%、楽しくない3%）
 - ・ 英語表現によってコミュニケーションできる喜びを表わす姿が見られるようになってきた。（英語の授業で楽しいと思う活動 中学年3位 尋ねたり答えたりすること、高学年2位 伝え合うこと）

ここで問題となるのが「英語（授業）の楽しさ」である。「一単位時間」の中で楽しく感じるのは、ゲームやアクティビティの時間と答える子どもが多いが、この内容について詳しく分析すると、それらの活動の中で外国語の会話や単語を使って十分に楽しんではいないものの、ゲームやアクティビティそのものの面白さ（勝敗や競争など）による楽しさの方が強く受け止められている。外国語に触れる楽しさやコミュニケーションでつながる楽しさといった点では、まだまだ不十分であることが分かる。

このような課題が生まれたのは、わたしたちが、授業における活動の楽しさばかりに目を向けてしまい、授業の本質というべき驚きや感動、発見の喜びなどを子どもたちにもっと味わわせようとする意図的な授業づくりが十分にはできていなかったからではないだろうか。そこで、英語の授業においても、学び本来の「心が動く楽しさを味わえる学習の在り方」について、さらに研究を深めていく必要があると考えた。

4 研究の改善 (Action)

驚きや感動、発見の喜びのある外国語活動の授業づくりのために、外国語活動の目標からこれまでの研究・実践を分析する。

周知のとおり、外国語活動の目標は、次の3つの柱から成り立っている。

- | | |
|---|--|
| ア | 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めること |
| イ | 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること |
| ウ | 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること |

本校におけるこれまでの研究・実践では、イの「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」、ウの「外国語表現への慣れ親しみ」について重点的に取り組み、成果も上げてきている。しかし、アの「言語や文化についての体験的な理解」についてはあまり触れずに研究が進められてきた。そこで、3つの柱をバランスよく取り上げるために、まず、「言語や文化についての体験的な理解」という視点を授業デザインに取り入れていく必要があると考えた。

しかし、ここで1つの疑問が生まれる。3つの柱のバランスが整えば、外国語活動の授業は、めざす授業へと改善されていくのであろうか。

小学校学習指導要領解説外国語活動編では、目標と3つの柱を示した後に、「3つの柱を踏まえた活動を統合的に体験することでコミュニケーション能力の素地を養う。」と書かれている。これは、3つの柱を「それぞれ個別に」ではなく、「統合的に」すなわち「有機的に関連付けて」体験させることによってコミュニケーション能力の素地は育っていくことを意味している。

そのことを示しているのが、前文部科学省教科調査官である菅正隆氏が「コミュニケーションの能力の素地」について示したイメージ図「素地の木」である。この図は、外国語活動の目標は、3つの幹が絡み合っただ統合的に「コミュニケーションの能力の素地」が育っていくことを表している。



図1「素地の木」

つまり、3つの柱とは、「バランスよく」が大切なのではなく、「相互に関連付け、響き合わせていく」ことが大切なのである。

そこで、本年度は、これまでの研究で培ってきた授業デザインのよさを継承しつつ、これまで重視してこなかった「言語や文化について体験的に理解を深める」という視点に着目して、図2のように、外国語活動の目標の3つの柱の関連を図り、また、指導と評価の一体化によって、驚きや感動、発見の喜びなどを十分に味わえる学習の在り方について明らかにしていきたい。

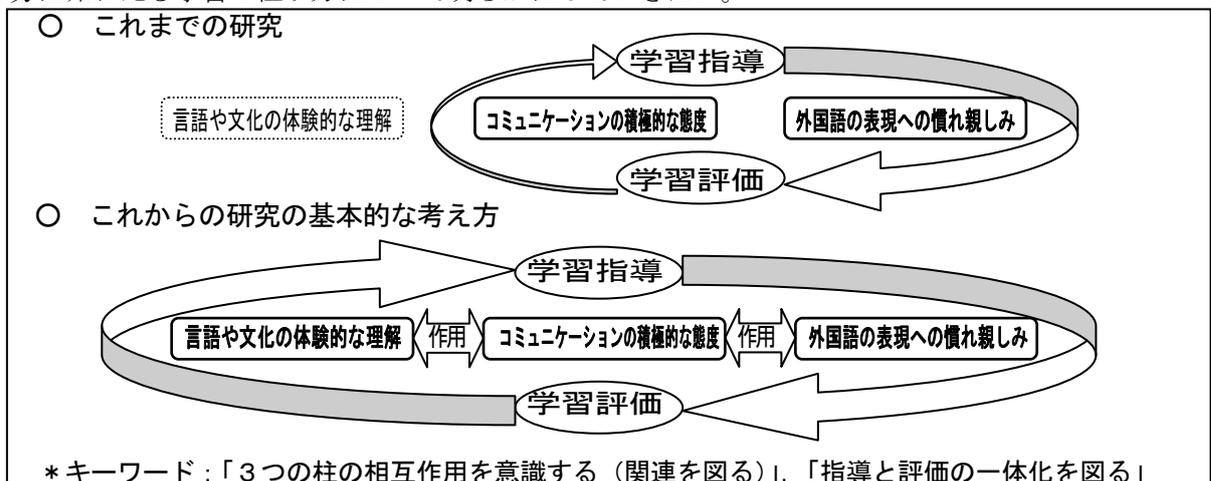


図2 外国語活動の目標 3つの柱の視点からみた研究の改善

II 新たな研究主題と設定の理由

外国語に自ら親しみ、積極的に伝え合おうとする子どもの育成 —3つの柱の相互作用を生かした指導と評価の工夫—

1 研究主題について

(1) 「外国語に自ら親しみ、積極的に伝え合おうとする子どもの育成」とは

主題にはこれまでの研究の成果を継承しつつ、新たに「3つの柱の相互作用を生かす」学習の意義を加えた。外国語に触れることや外国語を通じたコミュニケーション活動を楽しむ授業によって、注意深く聞いて相手を理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの心地よさや大切さ・難しさを実感しながら、自分の思いを伝えようとしたりする子どもを育成していくことには変わりはない。その際、これまで用いてきた授業デザインだけでなく、「3つの柱の相互作用」という視点を取り入れることによって、言語や文化に対する気付きから生まれる内発的動機に基づいて、子どもが自ら（能動的に）外国語に親しみ、さらに豊かになった気付きを積極的に伝え合おうとする子どもの姿も目指していく。

驚きや感動、発見の喜びを伴って、これまで以上に意欲をもって外国語に慣れ親しみ、伝えたい切実感をもって相互に伝え合おうとする子どもを育成したい。

(2) 副題として、新たに加えた「3つの柱の相互作用を生かした指導と評価の工夫」とは

ア 「3つの柱の相互作用を生かした指導」について

3つの柱の1つである「言語や文化についての理解」は、知識として教えられるものではなく、体験的に深められるものである。これは、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ活動」や「外国語を通じたコミュニケーション活動」を通して、日本語との違いや言葉の面白さ・豊かさ、多様なものの考え方に気付き、深められることを意味している。あるいは、図3に示すように、「言語や文化について新たな気付き」をもつことによって、「外国語の音声や基本的な表現に親しむ活動」に喜びをもつことになり、また、他にも違いがあるのではないかという期待から、より注意深く外国語を聞こうとする意欲につながる。さらに、言語や文化についての自分の気付きを友達に伝えようとする「積極的なコミュニケーションへの態度」を生み出すことにもつながる。このように、3つの柱を相互作用的に関連付けることによって、子どもたちが外国語に触れたり外国語で伝え合ったりする活動に、喜びや感動、必然性を感じさせることができると考える。

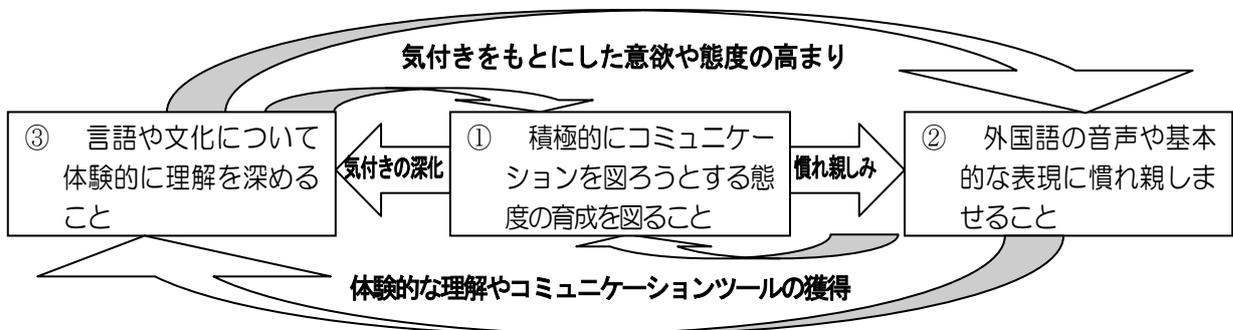


図3 外国語活動の目標の三つの柱とその相互作用

イ 基本的な評価の考え方について

「3つの柱の相互作用を生かす」という視点から学習活動をデザインし、実践した場合、評価で問題となってくるのが、「それぞれの相互作用をどのように見取るのか」ということである。わたしたちは、この点については、一単位時間における重点目標（本時で子どもに身に付けさせたい力）を確実に見取ることが、相互作用の成果を見取ることにつながると考えている。なぜなら、3つの柱を関連付ける目的は、先述の「外国語に触れたり、外国語で伝え合ったりする活動に、喜びや感動、必然性を感じさせる」ことと、「授業の中核となる指導内容を効果的に身に付けさせることができる」と考えているからである。また、相互に関連付けた学習活動の成果を総括的に評価する際は、単元を通して、子ども一人一人に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が育成されたかを見取るようにする。このことは、外国語活動の目標（3つの柱で構成）の重点が、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」であるからであり、単元の最終的な成果は、子どもたちの「外国語活動って楽しいな」、「相手にもっと伝えたい」、「相手の話をもっと聞きたい」という気持ちが意欲的な学習態度として表出すると考えるからである。

（※ 評価の詳細については、P.12 の実際Ⅱで述べる。）

2 主題設定の理由

研究主題の設定に当たっては、先に示した通り、これまでの研究の反省から、よさの継承と課題の改善によるところが大きい。同時に、本研究は、次のような外国語活動の求めに応える研究である。

(1) 外国語活動創設の経緯から

外国語活動には、その創設の前から、「英語教育的な視点」（英語のスキルをより重視する考え方）と「小学校におけるコミュニケーション教育の一環としての視点」（国際コミュニケーションをより重視する考え方）という二項対立の構図があった。そして、この構図において、前者の立場から外国語の習得だけがクローズアップされないよう、むしろ、後者の立場に立って、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成のために「支えるもの」としての慣れ親しみや「結果として」の慣れ親しみがあるととらえるべきであるという考え方になっていった。この源流は、中央教育審議会教育課程部会の分科会「外国語専門部会」が出した「小学校における英語教育について」に見ることができる。それは、小学校における英語教育の充実の必要性和検討すべき課題を鑑み、小学校における英語教育の目標と内容をまとめたものである。そこでは、小学校段階における英語教育の目標について、先の二項対立の構図の中で、何のために英語を学ぶのかという動機付けを重視するとの観点や、言語やコミュニケーションに対する理解を深めることで国語力の育成にも寄与するとの観点から、あくまでも中学校英語教育の前倒しのような英語のスキルの学習という考え方ではなく、国際コミュニケーションをより重視する考え方を基本とすることが適当であると結論付けている。

これに対し、「英語のスキルをより重視する考え方」、「国際コミュニケーションをより重視する考え方」という2つの立場を二項対立の構図でとらえるべきではないという考え方もある。これは、「両者は二律背反するものではなく、英語教育を取り囲む条件によって、多少割合が変わるだけ」とする考え方である。

（岡 2009）すなわち、前者か後者かという二者択一的な発想ではなく、両者を有機的に関連付けながら考えていくことが肝要とする考え方である。

外国語活動の目標を構造としてとらえるならば、築道、大谷（2010）が示すように、「外国語を通じて①言語や文化についての体験的な理解を深める②コミュニケーションへの積極的な態度を図る③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」という下位目標を統合的・有機的に実現することによって、『コミュニケーション能力の素地』を養うという最終目標を達成する」という構造が妥当であろうと考える。

本研究は、この考え方に立ち、外国語活動の在るべき姿を明らかにしていきたい。

(2) 鹿屋市の小学校英語教育における変遷から

鹿屋市では、平成17年度から構造改革特別区域特区の指定を受け、「かのや英語大好き事業」の研究をスタートさせた。そして、平成20年度からは市内すべての小学校が教育課程特例校の認定を受け、鹿屋市小学校英語科学習指導要領及びガイドブックをもとに、小学校1年生から「英語科」の授業に取り組んできた。しかし、「英語科」という名称は、中学校の英語科の授業の前倒しをしなければならないというイメージを与え、また、目標に掲げた「英語を聞いて理解する能力と英語を話し伝える能力」という言葉は、スキルを重視した指導をしなければならないという誤解を生じさせかねないという課題が浮き彫りされてきた。そこで、23年度より、「英語科」を「外国語活動」と変更し、それに伴って、ガイドブックも一部変更された。このことは、名称の見直しだけでなく、新たに指導のあるべき姿も見直されたことも意味している。すなわち、「英語嫌いをつくりたくない」という不易を継承しつつ、新たな指導と評価の在り方を再構築していくことが求められている。本研究はこの求めに応えることを目的としているものである。

III 本年度の研究の構想について

1 研究の仮説

仮説Ⅰ： 「言語と文化に関する気付き」を生み出し、それをもとにして3つの柱を相互作用的に関連付けた指導を展開すれば、驚きや発見のある外国語活動の学習ができるのではないか。

仮説Ⅱ： 3つの柱を相互作用的に関連付けた指導において、評価を効果的に行えば、指導の手だてがより子どもに寄り添い、外国語に触れたりコミュニケーションを図ったりする活動に対して子どもが積極的に楽しめる学習ができるのではないか。

2 研究の視点、内容及び実際

(1) 視点Ⅰ：「言語と文化に関する気付き」をもとに、外国語活動における3つの柱の相互作用を生かした学習指導の在り方を明らかにする。

3つの柱の相互作用的な関連を図るという視点から授業をデザインしていく際、キーワードとなるのが「気付き」である。特に、一単位時間においては、『気付き』を仕組む」という観点から授業の工夫を考えたい。

気付きの仕組みと一単位時間の授業の工夫

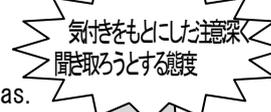
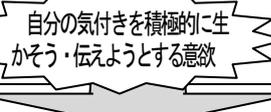
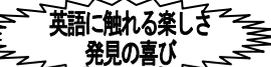
導入：子どもが興味をもち、気付きを生みやすい提示に心がけ、驚きや感動とともに「気付き」を意識させる。
 展開：注意深く聞き取る必要のある素材を加え、個々の「気付き」を積極的に交流させる。
 終末：「気付き」を基に学習を振り返らせ、自他の高まりや学びの意義を実感させる。

では、3つの柱の相互作用的な関連を図るという視点から授業をデザインしていくと一単位時間の授業はどのように変わるのか、3年生の「言語の違い（異同）についての気付き」を生かした実践を通して、具体的に見ていく。

言語の違い（異同）についての気付きを生み出す題材としては、音声（発音）、アクセント、音節、非言語的言語（ノンバーバルコミュニケーション）スキルなどが考えられる。

そこで、音声の違い（異同）についての気付きを生み出す工夫として、単元「わたしの好きなもの」（3時間）において、各授業の導入での歌の代わりにMPI（旧 松香フォニックス研究所）の「バナナじゃなくて Banana チャンツ」を用いたチャンツを取り入れるようにした。これは、日本語で用いられる「バナナ」、「プリン」、「ケーキ」に対して、「Banana」、「Pudding」、「Cake」などより英語に近い音声・アクセントに、リズムに乗ってふれることのできるチャンツである。（「バナナーBanana」だけでなく、「ライオンーLion」、「ドイツーGermany」など、日用品、衣類や建物と多様な題材がCDに収録されており、学習で用いる言語材料に合わせて活用することができる。）これによって、子どもたちは、「Banana」のアクセントの違いや「Pudding」、「Cake」などの音声の違いに気付き、日本語との違いへの驚き、英語の特徴やおもしろさを発見した喜びをもつことができた。

鹿屋市小学校外国語活動 年間指導計画 第1版 第3学年英語授業案9より

| 過程 | 主な学習活動 | 主な学習活動と音声への気付きの高まり |
|----|--|--|
| 導入 | Warm up 1 あいさつをする。 2 例“大きなくりの木の下で”を歌う。 3 スキットを見る。 4 めあてをつかむ。 英語ですきではないものを言ってみよう。 | Warm up 1 あいさつをする。 2 「バナナじゃなくて Banana チャンツ」 3 スキットを見る。 4 めあてをつかむ。 英語ですきではないものを言ってみよう。  |
| 展開 | Activity 5 チャンツでくだものの復習をする。 6 モデルスキットを見る。 A: Do you like bananas? B: No, I don't like bananas. 7 チャンツで英語表現の練習をする。 8 バトンゲームをする。 | Activity 5 チャンツでくだものの復習をする。 6 モデルスキットを見る。 A: Do you like bananas? B: No, I don't like bananas. 7 チャンツで英語表現の練習をする。 8 バトンゲームをする。   |
| 終末 | Review 9 学習したことをふり返る。 10 あいさつをする。 | Review 9 学習したことをふり返る。 10 あいさつをする。  |

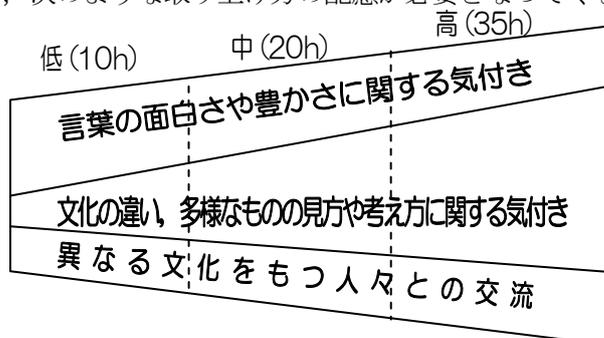
このように、導入では、子どもの気付きを促すために、言語素材群の構成を Banana や Chocolate, Ice cream など日本語でも用いるがアクセントが異なるもの、Pudding や Cake など日本語の音声表現とは異なるものに絞る。これにより、子どもはアクセントや音声の違いに注意を払い、もっと多くの違い

に気付こうとする態度をもつことができた。その態度を展開の中で生かし、子どもの気付きへの意識を途切らせないことが重要となる。展開では、導入で用いた言語素材群に Grapes などの素材を加え、どの子にも新たな気付きを生み出させるようにする。子どもは、自ら進んで英語表現に積極的に親しみ新たな発見をしようと試みた。そこには、単なる活動の楽しさだけでなく、英語表現に触れることの楽しさ、英語表現から新たな発見を得る楽しさでわくわくする子どもの姿があった。さらに、自分の好きなものを伝え合う場をつくと、当然ながら、どの子も自分が発見した表現を用いて伝え合おうとしたのである。このように気付きを途切れることなく、次の活動に有機的に関連付けていくためには、子どもの気付きが、次の活動の内発的動機付けになるような形成的な評価が不可欠となる。そのような評価によって、終末における振り返りでは、ほとんどの子どもが、気付きを基にした発見の喜び、新たな表現に触れた楽しさなどを実感することができるのである。

ここでは気付きを生み出す仕組みとして「言語の異同」を取り上げた実践を例に見たが、学習指導要領によると「日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。」と述べ、次の3点を内容として示している。

- | |
|---|
| (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。 |
| (2) 日本と外国の生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。 |
| (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。 |

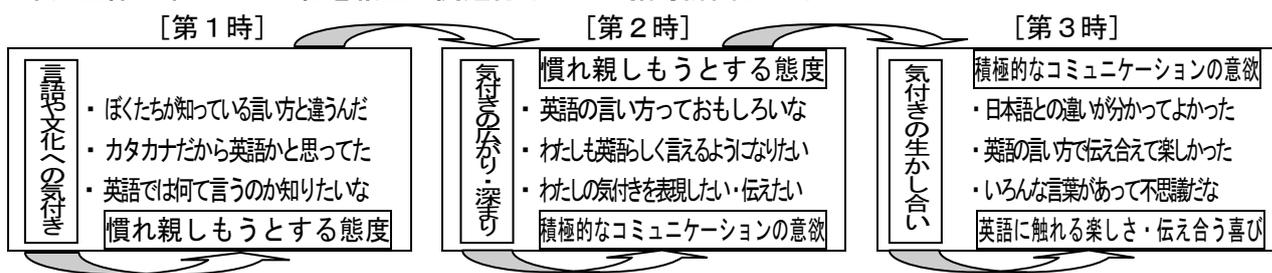
これを踏まえて「言語や文化への気付き」を仕組んでいく際、発達段階をはじめとする児童の実態に応じて、次のような取り上げ方の配慮が必要となってくると考えられる。



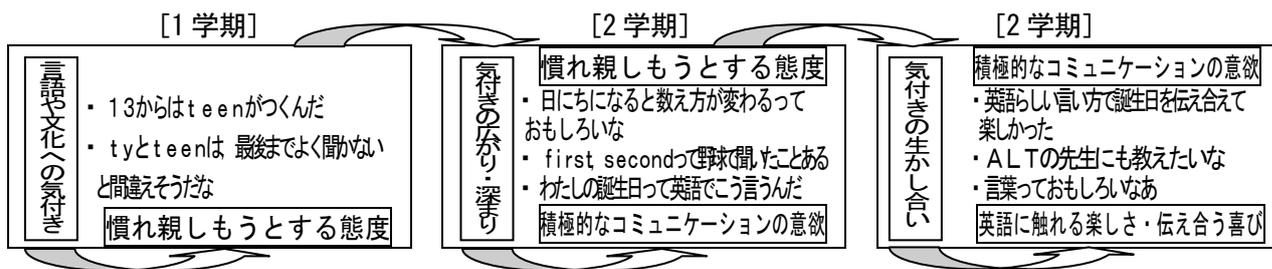
すなわち、「仕組みのステップ」として、低学年では、言語に関する気付きを十分に味わわせ、中・高学年と学年が上がるに伴って、文化に関する気付きを取り上げていくような子どもに無理のないステップを心がけたい。異なる文化をもつ人々との交流は、ALTとの触れ合いが中心となるだろう。各段階に応じた交流を進めていくようにしたい。

このような「3つの柱の相互作用を生かす」という視点による授業デザインの可能性としては、先述のような「一単位時間の中で3つの柱を相互に関連付ける授業デザイン」の他にも、次のようなタイプが考えられる。

単元全体の中で3つの柱を相互に関連付けていく指導計画デザイン



学期や年間という大きな枠組みの中で相互に関連付ける年間計画デザイン



本研究では、「3つの柱の相互作用を生かす」という視点から、一単位時間の授業の在り方とともに、単元における工夫、評価モデルの開発と検証に取り組んでいくことにした。

内容 I

ア 授業モデルの研究

- ・ 気付きを生み出す仕組みと相互作用に結び付けていく手だての研究

イ 単元モデルの研究

- ・ 気付きをもとに相互作用を深めていく単元構成の研究

実際 I

ア 一単位時間の中で3つの柱を相互に関連付けていく授業デザイン

実践事例1：単元名「かぞえてみよう」第1学年（2/2時間目）

〔意欲をもつ・つかむ・楽しむ〕

◇言語や文化に関する気付き

11と12の英語での言い方を予想する。

意欲や
態度の
高まり

〔楽しむ・深める〕〔振り返る〕

◇外国語への慣れ親しみ

◇コミュニケーションに関する関心・意欲・態度

「ミッシングゲーム」, 「ごちそう探しゲーム」

構想の意図： 前時に学習した10までの数え方をもとに「11」と「12」の英語での表現の仕方を考えさせ、日本語と違い特別な言い方で表されていることに気付かせ、英語での表現の仕方を聞いて12までの数を数えてみたいという意欲をもたせる。

導入：「意欲をもつ・つかむ」

Song Introduction
のねらい

- 前時に学習した10までの数を「10 little monkeys」を歌い、歌の続きの物語を話しながら「11」と「12」の表現の仕方に興味をもたせるようにする。

英語の物語「10 little monkeys」の続きを話し、「11」と「12」の表現の仕方への関心を高める。

〈手順及び留意点〉

- ・ 歌に合わせて黒板に1匹から10匹までのパネルを貼ることで、歌がスムーズに歌えるようにする。
- ・ 前時までの実態や歌の様子を考慮して、10までの数の中で難しかった数の発音を反復して練習させる。
- ・ 歌の続きの物語を日本語で話し、11匹目と12匹目の猿のパネルを提示する。
- ・ 「11」と「12」の英語での表現の仕方に目を向けさせた上で、本時のめあてを確認させる。



〔JTE (英語指導講師) の口元に注目して発声〕

活動：「楽しむ・深める」

Activity
のねらい

- 本時のねらいを明確にし、「11」と「12」の英語での表現の仕方に慣れ親しませるようにするとともに、前時に難しく感じていた「5」、「8」、「9」の発音にも慣れさせるようにする。

「11」と「12」の表現の仕方が日本語と違うことに気付かせ、1～12までの言い方に慣れ親しませる。



〔教具の工夫と板書例〕

〈手順及び留意点〉

(1) Activity 1 「表現の仕方を想像」

- ・ 「11」と「12」の英語での表現の仕方を子どもたちの自由な発想で考えさせる。

11 → One one, Ten one, eleven など

12 → One two, Ten two, twelve など

(2) Activity 2 「ミッシングゲーム」

- ・ 3つの数字カードを発音し、その後隠されたカードを当て発音させる。

- ・ 数字を意図的に選び、繰り返し発音することで1～12までの表現の仕方に慣れさせる。
- ・ 英語での表現が難しいと感じている子どもに寄り添い、楽しく安心して参加できるような雰囲気を作る。

- (3) Activity 3 「ごちそうさがしゲーム」ペアで箱の中のボールに書かれた数字を英語で言い、黒板に貼られた同じ数字のカードをめくり、バナナがあったら黒板の猿にえさをあげる。
- ・ HRT (担任) が子どもに箱からボールを引かせ、ペアの子どもに発音させる。
 - ・ HRT (担任) は、子どもの様子を見ながら一緒に発音するなど、ペアの子どもが自信をもって表現できるようにさせる。
 - ・ JTE (英語指導講師) は、カードの裏にバナナカードを隠し、ボールを引いた子どもにその数を再度発音させ、カードをめくらせる。
 - ・ 楽しく活動できたことを褒め、感想を交流させることで、お互いのよさを認め合えるようにさせる。
 - ・ 全てのペアを様々な英語表現で称賛する。

終末：「振り返る」

本時の学習内容を振り返り、主体的に活動できた子どもやペアを紹介し、全体の場で称賛する。

実践事例 2：単元名「数をたずねよう」第4学年（1／3時間目）

〔意欲をもつ・つかむ・楽しむ〕

◇言語や文化に関する気付き

- ・ 日本とアメリカの数の記録の違いに気付く。

「数当てゲーム」

意欲や
態度の
高まり

〔楽しむ・深める〕 〔振り返る〕

◇外国語への慣れ親しみ

「どこの国の言葉かな」

- ・ 日本や英語、韓国語、中国語、スペイン、フランス語の数の数え方の共通点や相違点に気付く。

◇コミュニケーションに関する関心・意欲・態度

構想の意図： How many～. を用いたActivityで、数を尋ねたり答えたりする表現に十分に慣れ親しませる。その際、HRT (担任) とJTE (英語指導講師) で「5」の表し方を変え、国によって様々な数え方があることにも気付かせる。さらに、中国語、スペイン語、フランス語、韓国語の数字の数え方を聞かせ、それぞれの数の言い方の共通点や相違点に気付かせることで、世界の言語についての興味を高める。

正 (HRT)

(JTE) +++++

導入：「意欲をもつ・つかむ」

Model skit
のねらい

- HRT (担任) とJTE (英語指導講師) とでモデルスキットを示し、場面を想像させることで学習の見通しをもたせるようにする。

飴の数を尋ねたり答えたりするスキットを見せ、スキットを見ての気付きを話し合わせることで、本時の学習への関心を高める。

〈手順及び留意点〉

- ・ JTE (英語指導講師) がHRT (担任) に持っている飴の数を尋ね、JTE (英語指導講師) は飴を1つずつ数えてから答えることで場面が想像できるようにする。

活動：「楽しむ・深める」

Activity
のねらい

- 数を使ったゲームを通して、数の尋ね方や答え方の表現や英語の音声やリズムに慣れ親しませるとともに、世界の国々の数の数え方を知ることにより、言語にはそれぞれ特色があることに気付き、世界の国々の言語や文化に興味をもつことができるようにする。

箱の中から飴をつかんで取り出し、飴がいくつあるかを尋ねたり答えたりする「数当てゲーム」を行い、数を尋ねたり答えたりすることへの意欲を高める。

〈手順及び留意点〉

- ・ 上面に穴の開いた箱の中から飴をつかんで取り出させ、飴の数を尋ねたり、答えさせたりすることにより、数を尋ねたり、答えたりすることに興味をもたせるようにする。
- ・ 2チームにわけ、どちらのチームの子どもが多くのお飴を取り出せるかを競わせ、勝敗をHRT (担任) が「正」の字で、JTE (英語指導講師) が「縦に4本線を横に並べて引き、それに横線を1本引く」方法で黒板に記録することで、数の数え方の違いに気付かせる。
- ・ 飴の数を尋ねたり答えたりする活動を繰り返し



〔活動の様子〕

行うことで、初めて出てきた表現に対する不安を和らげ、自信をもって意欲的に活動できるようにする。

- 子どもたちを様々な英語表現で称賛する。

他の国の言語の1から10までの数え方を聞かせ、どこの国の言語の数え方なのか予想させ、共通点や相違点について考えさせる。

(手順及び留意点)

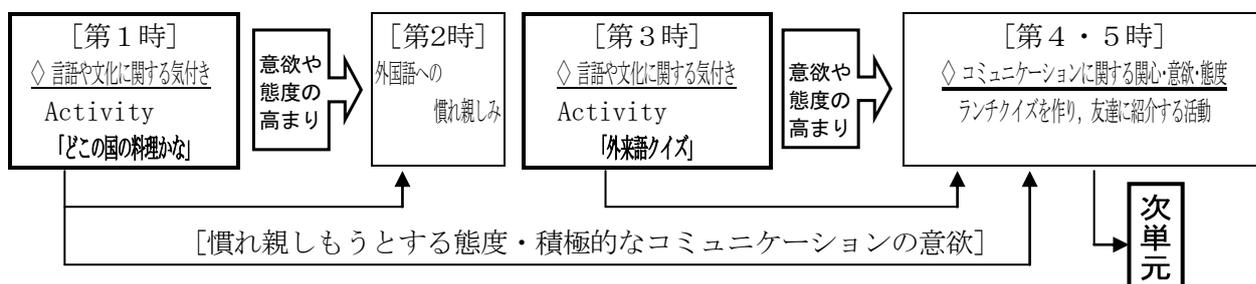
- 中国、スペイン、フランス、韓国の国旗を黒板に掲示し、それぞれの国の言語で1から10までを数えている音声を流し、どの国の言語なのか予想させる。
- 1から3までの数え方を再度聞かせ、共通点や相違点について考えさせることで、世界の言語について興味をもたせる。

終末：「振り返り」

本時の学習内容を振り返り、主体的に活動できた児童を紹介し、全体の場で称賛する。

イ 単元全体の中で3つの柱を相互に関連付けていく指導計画デザイン

実践事例3：単元名「ランチクイズを作ろう」第6学年（全5時間）



構想の意図： 世界の料理や食べ物に関する外来語についてのクイズを行い、外国の言語や文化にふれる楽しさを感じさせ、オリジナルのランチクイズを紹介したいという意欲をもたせる。

第1時：「どこの国の料理かな」

Activity
のねらい

- 典型的な外国の料理について、ICT機器を用いて提示することで、日本と外国の食文化の似ている点や異なる点に気付けるようにする。

典型的な外国の料理をICT機器を用いて提示し、国名や共通・相違点などを考えさせる。

(手順及び留意点)

- 子どもたちが国名をイメージしやすい料理とそうでない料理を紹介する。
- 日本の食文化に似ている国の料理、独特の食文化を有している国の料理を紹介する。
(例) 似ている国：韓国、中国…等 異なる国：インド、エジプト…等
- 日本の食文化との共通点や相違点に気付くことができるように、典型的な日本の料理についても提示する。
- クイズの出題や子どもたちとのやりとりなどでは、子どもが理解できる英語表現（インプット）をできるだけ使用する。
- 少人数のグループでクイズに挑戦させ、互いにコミュニケーションを取らせながら、解答させる。



[ICT機器の活用例]



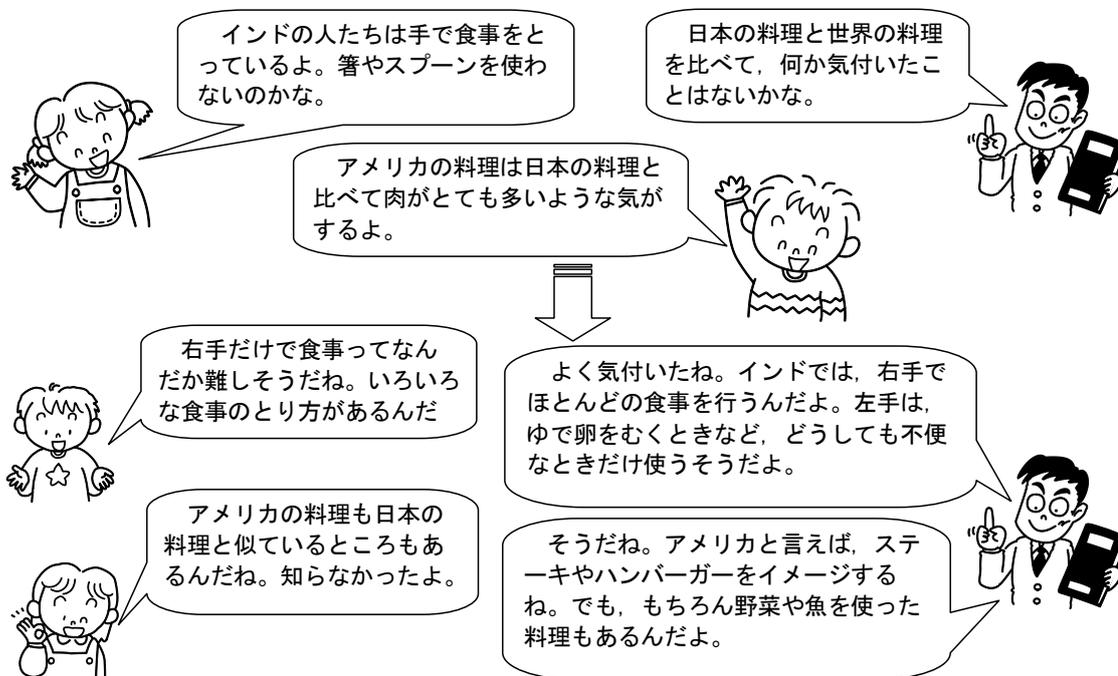
[グループでの様子]

提示した料理について気付いたことを引き出し、多様な食文化への理解を深めさせる。

〈手順及び留意点〉

- ・ 世界には、多様な食文化があることを理解させるとともに、今回、紹介した料理以外にも様々な料理があることを押さえる。
- ・ 何らかの気づきを発表することができた子どもに対しては、様々な英語表現で称賛する。

〈教師と子どもたちのやりとりの一部〉



主体的に活動することができたグループに対して、全体の場で称賛する。

第3時：外来語クイズ

Activity
のねらい

- 身の回りの食べ物に関する外来語についてICT機器を用いて提示することで、外来語は様々な国から伝わってきていることなどに気付けるようにする。

身の回りの食べ物に関する外来語についてICT機器を用いて提示し、伝わってきた国を考えさせる。

〈手順及び留意点〉

- ・ 様々な国から伝わってきた食べ物に関する外来語を紹介する。
(例) 英語：マシュマロ ロシア語：イクラ
ポルトガル語：パン、カステラ 中国語：チンゲンサイ、ちゃんぽん
フランス語：クロワッサン、パフェ …等
- ・ 子どもたちに、提示された言葉は「外来語か、日本語か」と尋ねる。
- ・ 少人数のグループでクイズに挑戦させ、互いにコミュニケーションを取らせながら、解答させる。



〔外来語クイズ〕



〔グループでの様子〕

予想した国名を発表させ、身の回りに様々な食べ物に関する外来語があることを理解させる。

〈手順及び留意点〉

- ・ 自分たちの身の回りには、まだまだたくさんの食べ物に関する外来語があり、普段の生活で当たり前のように使用していることを理解させる。
- ・ 外来語と歴史との関連については、少し触れる程度とし、他教科の目標に入り込まないようにする。
- ・ 何らかの気づきを発表することができた子どもに対しては、様々な英語表現で称賛する。

〈教師と子どもたちのやりとりの一部〉



いいところに気付いたね。どうして、中国とポルトガルなんだろうね。社会科の学習を思い出してごらん。

中国やポルトガルから伝わってきた言葉が多いね。

そうか、日本とのつながりがあったからだね。



主体的に活動することができたグループに対して、全体場で称賛する。